資源環境経済学特別演習Ⅱ　議事録
2013年度　第12回

報告題名(title)： 食の安全教育についての探察

報告者(name)	金　鑫	日時	12月12日　午後3時～
所属分野(labo)	農業経営経済学	場所	第2講義室
座長	西田　陽平	議事録担当者	西田　陽平

出席者

長谷部、木谷、盛田、米澤、米倉、冬木、伊藤、石井、八木、タンボウニ、山口、カライ、ナスン、趙、今井、井上、佐々木、志賀、西田、朴、オウ、伊藤、江守、小田嶋、金、藤井、町田、秀、武居、畠山

報告要旨(Abstract)

昨今、食品に関する事件が相次いで発生し、消費者が食材を選ぶときの不安感が高まってきた。異物混入、生産地や原産地の偽表示、食中毒、遺伝子組み換え食品などの「食品問題」をめぐって、生産・加工・流通業者、行政が連携して、食品の安全性を確保するために、努力している。しかし、生産・加工・流通業者の一部は利益のため、食品偽装や詐欺事件を誘発している。そこで、食品企業・業界への信頼性は一瞬にして壊れ去ることになった。行政は製作した法律や制度にも問題や不備の点がたくさんある。その背景の下に、食品の安全を確保するには、企業と行政だけではなく、消費者も自分の責任を認識し、食品安全に関する知識や能力を身に着ける必要があるといわれている。

そういう「食のリテラシー」をマスターするには、相関教育を受ける必要があると考えられている。実は、1970年の国民生活センターを始め、消費者に食品安全知識を教える教育がずっと行っている。具体的には、昔から、家庭教育や学校教育、社会教育など三つの種類がある。しかし、そういう教育をかなり受けているにもかかわらず、まだいろいろな食品安全事件が発生している。

このような背景のもとで、食品の安全教育を対象として、研究したい。

質疑・応答(Q＆A)

西田：今のところ考えている調査・研究の方法はどんなものを考えているか？

金：研究の具体的な計画・目的はあまり決まっていない。小学校では食の安全教育を行っているが、どのくらい定着しているのか、学習の効果を高めていくにはどうしたらいいのかに興味がある。最初は学力の評価に注目して調査を行いたい。しかし、研究方法はまだ自分の中でまとめられていない。

西田：学校教育に対象を絞るのか？

金：学校教育への注目が高まっているので、そうしたい。

西田：日本を対象とするのか？

金：基本的には日本を対象にするが、中国との比較も行いたい。

木谷：あなたが考えている食品安全性の教育のイメージとは？

金：先生が必要な知識（手洗いとか食品安全表示等）を資料やスライドで教えているイメージ。

木谷：絶対数が決まっている授業のコマ数の中で、食品の安全性教育の時間だけを増やすのか？増やした方がいいという結論が修論の結果として出ても実現は出来ない。教える内容を増やすことだけでは意味がない。食品安全教育にとって今までと同じような講義的な形式は意味がない。味覚とかの感性を高める教育の仕組みを先に作るべきだ。

今の食品安全教育はおかしい！ということを説得力を持って提案する事が論文だと思う。

盛田：今後の課題に関連して、テーマを「食品の安全教育」としているが、食品の安全教育には学校・家庭・社会と 3 つに分けられて論じられてきている。それぞれの教育機能に関して整理されているか？

それぞれの場において何をどう教育するかという機能をあらかじめ整理しないと、課題１である「学校が家庭の代わりになれる限界」に関して言えない。それぞれの場における教育の機能整理をしっかりとしないといけない。